

【論文】

静岡県南伊豆町方言における無核型音調の 音響学的特徴と聞こえ

亀田 裕見

On Fundamental Frequency Patterns of Unmarked Type Accent in Minamizu-cho Dialect

Hiromi Kameda

南伊豆町方言の無核型の音調バリエーションを音響分析を施すこと
によって見直す。東京語の無核型と比べて、基本周波数の変化動
態が様々で変化量も幅がある。基本周波数は文節中で初頭の高さを
下まわることがある一方、上昇が小さく下降の傾斜が緩やかである
ことから、東京語的な聴き取りでは下降位置を定めにくく感じられ
る。しかし、重起伏や連続下降の発話を分析すると、東京語と同じ
「初頭の高さ」が基準となって働いていると考えられる。

キーワード：南伊豆町方言、無核型、基本周波数曲線、重起伏、連
続下降

1. はじめに一南伊豆町方言における無核型音調の問題点一

本稿は拙稿（1998、以下前稿と呼ぶ）に引き続き、特殊アクセントとい
われる南伊豆町方言の3拍名詞無核型の音調バリエーションを、基本周波
数を抽出し、その変化パターンと調査者の聴き取りとの対照、および東京
語との対照という方法を用いて、その特徴を考察するものである。

有核型を考察した前稿で、調査者の聴き取りはあくまで東京語的な聴き
取りであり、当該方言に特有の基本周波数変化を必ずしも正確に聞き取っ
ていないことが分かった。また、共通語で下降位置の聴き取りの関わって

いる基本周波数の「始点を下まわる位置」という特徴より、当該方言では「下降が始まる位置」の方が有核型の各型を特徴づけていた。無核型においてはどうかであろうか。

当該方言の無核型の音相は、共通語話者からすると非常に微妙で聞き取りにくい。しかも、1語が複数の音相によって発音される。この聞き取りにおいて認められる音相バリエーションについては拙稿(1994)に示している。無核型の特徴をまとめて述べれば、他の型より音相の種類が多く聞かれ、最もよく聞かれるのは [○●○▷] [○●●▶] (●はやや高い拍を表す) という音相である。また、下降の段差が小さいものや、それが連続して複数の下降が聞こえたり、2回目の上昇があって重起伏に聞こえたりする。

このような特徴は、伊豆南部の多地点調査の結果を記述した中條(1996)においても同様に報告されている。中條氏によると、男性は平板に発音する傾向が優勢だが、女性に [●○○] ~ [●○○○] ~ [●○○○] に発音する傾向があり、地域によっては [○●○▷] [○●●▶] [○◎◎▷] もありゆれが目立つという (◎はやや高い拍を表す)。同氏の別論文(1983)では、2拍名詞についてであるが、東京語で平板型に当たる語(飴、牛など)の音相は [○●▶] [○●▷] [●○▷] のように動揺が多く、「平板型を欠く個人もいる」と述べられているのも、ある意味では頷けることである。

上野(1977)には、無核型には上野氏の言うところの「句音調」がそのま出やすいということが指摘されている。この考え方によれば、無核型に現れる音調が非弁別的な特徴を見出す鍵となるわけである。まずは共時的な観点からこれらの音相がどのように位置づけられるのか、話者においてどのように意識されているのかを問うことが重要である。少なくとも筆者はまだ、当該方言の無核型が有核型に移行する途中であるという通時的解釈を述べるだけの材料を持たない。この上野氏の観点を考慮しつつ、無核型に所属する語に認められる様々な音相をまずは明確に捉え、その性質を

改めて考えたい。

2. 分析の観点と方法

東京語における基本周波数のパターンの特徴については、杉藤美代子氏の研究(1969 a・1969 b・1972)が、絶対的な音の高低配置ではなく、音調の「動態」、すなわちアクセント核のある次の母音の下降が、アクセントの聞こえを決定していることを明らかにしている。また、2拍名詞の結果であるが、篠木・佐藤(1991・1992)にも詳しい分析がある。資料としているのはNHKアナウンサーの発話である。これによると、/○○▷/の下降は緩やかで、高い2拍目と最も低い助詞の基本周波数の差は平均56 Hzで、/○○⁷▷/の平均周波数差149 Hzと比較すると二つの型の違いは明らかである。基本周波数の動態は、1拍目は低く2拍目は高く続くが、2拍目以降は真っ平らではなく2拍目以降助詞にかけて緩やかに下降し、助詞は1拍目より高くつく傾向にある。この「助詞が1拍目より高くつくか低くつくか」は平板型と尾高型を区別するとしている。いずれにしても、無核型における下降は緩やかで、それを東京語話者は下降として聞き取っていない。いわゆる「自然下降」である。

これらの東京語の先行研究を参考に、本稿では以下の観点で基本周波数の変化パターンを記述し、東京語との比較および調査者の聞き取りとの関係を見ることにする。

A. 基本周波数の変化パターン

- ①基本周波数曲線の上で下降が始まる拍
- ②発話初頭の高さを下まわる拍
- ③2回目の上昇・下降の有無(重起伏・連続下降)

B. 基本周波数の絶対変化量

- ①上昇量(基本周波数の発話初頭値と文節中の最高値との差)

②全体下降量（文節中における基本周波数の最高値と最低値の差）

③下まわり下降量（発話初頭値を基準として文節中にそれをどの程度下まわるか。①-②の計算で求め、マイナスの値をとれば下まわることを表す）

Aの①-③は前稿でも扱った観点である。Bの①-③の観点は、南伊豆方言だけでなく東京語も無核型の音調は基本周波数の変化量が小さいため、両者の違いをより明確に記述するために付け加えたものである。

3. 調査と資料について

本稿の資料は、前稿と同様3拍名詞の文発話（○○○ガアル）をランダムに読み上げてもらった結果である。静岡県南伊豆南伊豆町の話者はTK氏（大正13年生まれ・女性）、東京語の話者はNM氏（昭和51年生まれ・女性）とNHKアナウンサー（注1）である。調査についての詳しいことは前稿に述べたとおりである。TK氏の発話回数は1語につき平均25.8回であったが、このうち録音状態などの不備のために音響分析に耐えられないものもあり、本稿の分析にはこのうち1語につき20発話が分析対象となった（注2）。NM氏の調査は10回発話、NHKアナウンサーの発話は1発話である。

分析語例は、南伊豆町方言では「車」「煙」「二十歳」「椿」の4語を取り上げる。このうち「二十歳」と「椿」は東京語においては頭高型であるが、南伊豆町方言においては音相のバリエーションの出現の仕方から「煙」や「車」と同じ型であると判断される（注3）。東京語の分析語は「車」と「煙」であるが、NHKのアナウンサーの発話では「煙」がないため「鯨」を示す。

基本周波数の抽出には音声録聞見（東大音声研）を使用した。結果をまとめた表中の順番は発話順ではなく、基本周波数変化の上で第1下降の始まる拍が早い順に配列してあり、発話NOは便宜的なものである。

4. 東京語における無核型の基本周波数曲線の特徴

先に東京語の特徴について述べる。NM 氏の結果を表 1・2 に、アナウンサーの結果を表 3・4 に示す。これを見ると両者の間には若干異なる点がある。それは、基本周波数変化の絶対量と、下降の始まる拍である。

絶対的な変化量では、上昇の大きさがアナウンサーは 50~60 Hz に対して、NM 氏は「車」での平均 33.6 Hz、「煙」で平均 28.3 Hz と小さい。全体下降量もアナウンサーで大きく、NM 氏は小さい。これは図 1 (アナウンサー) と図 2・3 (NM 氏) に示した実際の基本周波数曲線の全体的な形状を見ても確認される。アナウンサーは明瞭な「への字」型を描くが、NM 氏は平坦な形を描く。上昇量も、「自然下降」といわれる基本周波数の低下も非常に小さい。

下降の始まる拍は、アナウンサーが 2 拍目からであるのに対して、NM 氏は 3 拍のはじめ、あるいは 3 拍の途中からと遅い。つまり、NM 氏は 1 拍目が上昇、2 拍目はほぼ平らに続き、3 拍目から徐々に下がり気味になるという動態を示す。

しかし、両話者には文節中(助詞の末尾までの間)で初頭の基本周波数の高さを下まわるかどうか、という点では一致している。両者とも下まわらない(*)かあるいは、わずかに下まわるとしても末尾の助詞で下回る。その絶対量は大きくても 6 Hz で、ほぼ文節中では初頭の高さを下まわらないといえる。この結果は、前述の篠木・佐藤両氏の先行研究の結果のとおりであることを確認したことになる。

5. 南伊豆方言の基本周波数変化パターンの特徴

以上の東京語の特徴と比べながら、表 5~8 に示した南伊豆町方言の基本周波数変化の特徴について述べる。

〔凡例〕

下降の始まる拍		初頭の高さを下まわる拍		第2上昇の有無 ↑：有り	上昇の聞こえ	下降の聞こえ	
1：1拍目から	3.5：3拍目途中から	1：1拍目中に	2：2拍目中に		1：[\uparrow ○○○△・・・]	1：[\uparrow ○○○△・・・]	3.5：[○○○△ \uparrow ・・・]
1.5：1拍目途中から	4：4拍目から	2：2拍目中に	3：3拍目中に		2：[○ \uparrow ○○△・・・]	1.5：[○○ \uparrow ○△・・・]	4：[○○○△ \uparrow ・・・]
2：2拍目から	4.5：4拍目途中から	3：3拍目中に	4：4拍目中に		3：[○○ \uparrow ○△・・・]	2：[○○ \uparrow ○△・・・]	0：[○○○△・・・]
2.5：2拍目途中から		4：4拍目中に				3：[○○○ \uparrow △・・・]	
3：3拍目から							

*：文節未まで下まわらない
マイナス付き数値は聴き取りにおいて、下降の段差が小さいことを示す
注：各発語は似た音相同士を並べて配列しており、発語NOは発音の順を示すものではない。

〔表1〕東京 NM氏 「車」 /○○○/

発語NO	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
基本周波数の絶対変化量	上昇(Hz)・・・①	31	48	44	19	25	18	25	49	42	38
	全体下降(Hz)・・・②	25	25	2	25	31	24	19	35	31	18
	下まわり下降(Hz)①-②	6	23	42	-6	-6	-6	6	14	11	20
基本周波数の変化	下降の始まる拍	3	3	3	3.5	3.5	3.5	3.5	3.5	3.5	3.5
	初頭の高さを下まわる拍	*	*	*	*	4	*	*	*	*	*
聞こえ	上昇の聞こえ	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
	下降の聞こえ	-3	0	0	0	-3	0	0	0	-3	0

〔表2〕東京 NM氏 「煙」 /○○○/

発語NO	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
基本周波数の絶対変化量	上昇(Hz)・・・①	30	31	18	24	30	30	24	24	29	43
	全体下降(Hz)・・・②	30	25	12	30	24	24	12	24	15	20
	下まわり下降(Hz)①-②	0	6	6	-6	6	6	12	0	14	23
基本周波数の変化	下降の始まる拍	3	3	3	3.5	3.5	3.5	3.5	3.5	3.5	4
	初頭の高さを下まわる拍	*	*	*	4	*	*	*	*	*	*
聞こえ	上昇の聞こえ	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
	下降の聞こえ	0	0	0	0	0	0	-4	0	-3	0

〔表3〕NHKアナウンサー 「車」 /○○○/

発語NO	1	
基本周波数の絶対変化量	上昇(Hz)・・・①	50
	全体下降(Hz)・・・②	52
	下まわり下降(Hz)①-②	-2
基本周波数の変化	下降の始まる拍	2
	初頭の高さを下まわる拍	*
聞こえ	上昇の聞こえ	2
	下降の聞こえ	0

〔表4〕NHKアナウンサー 「鯨」 /○○○/

発語NO	1	
基本周波数の絶対変化量	上昇(Hz)・・・①	60
	全体下降(Hz)・・・②	60
	下まわり下降(Hz)①-②	0
基本周波数の変化	下降の始まる拍	2
	初頭の高さを下まわる拍	*
聞こえ	上昇の聞こえ	2
	下降の聞こえ	-4

〔表5〕南伊豆 TK氏 「車」 /○○○/

発語NO	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	
基本周波数の絶対変化量	上昇(Hz)・・・①	0	21	51	18	13	48	37	38	37	37	52	12	12	20	44	6	37	18	29	49
	全体下降(Hz)・・・②	54	40	49	69	56	62	42	51	37	50	37	32	37	44	26	32	45	58	37	26
	下まわり下降(Hz)①-②	-54	-19	2	-51	-43	-14	-5	-13	0	-13	15	-20	-25	-24	18	-26	-8	-40	-8	23
基本周波数の変化	第1下降の始まる拍	1	2	2	2	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	3	3	3	3	3	3.5
	第2上昇の有無	↑										↑	↑	↑							
	第2下降の始まる拍	4										4	4	*				3.5	3.5	4.5	
	初頭の高さを下まわる拍	1	3	*	2	3	4	4	4	4	5	4	*	3	3	2	*	3	4	3	4
聞こえ	上昇の聞こえ	1	-2	2	1	1	2	2	2	2	-2	2	1	1	1	2	2	2	-2	-2	2
	第1下降の聞こえ	-1	-2	0	-1	-1	-2	-3	-3	4	-3	4	-2	-2	-2	-3	-2	-2	-2	-2	0
	第2下降の聞こえ	4	-3		-3		-3					-4	-4	4		-3	-3				-3

【表6】南伊豆 T K氏 「煙」 /○○○/

発話NO		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
基本周波数の絶対変化量	上昇 (Hz) ①	0	26	43	37	71	19	35	24	44	17	29	38	68	32	68	37	43	39	37	35
	全体下降 (Hz) ②	63	39	45	49	56	56	86	29	63	43	43	43	55	51	50	46	63	52	30	5
	下まわり下降 (Hz) ①-②	-63	-13	-2	-12	15	-37	-51	-5	-19	-26	-14	-5	25	-23	17	-13	-3	-24	-15	5
基本周波数の変化	第1下降の始まる拍	1	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	↑	2.5	2.5	2.5	3	3	3	3	3	3	3	3	3.5
	第2上昇の有無																				
	第2下降の始まる拍						3.5		3.5	4	4	4.5							4	4.5	
	初頭の高さを下まわる拍	1	4	4	4	*	2	3	4	4	3	3	4	*	4	*	4	4	4	4	*
聞こえ	上昇の聞こえ	1	-2	2	-2	2	1	-2	-2	2	1	-2	2	1	-2	2	-2	2	-2	-2	-2
	第1下降の聞こえ	-2	-2	-3	-2	-2	-2	1.5	-3	-2	-2	-2	-3	-2	-2	-2	-2	3	-2	-2	4
	第2下降の聞こえ						-4	-3				3.5	-4			-4				-4	

【表7】南伊豆 T K氏 「二十歳」 /○○○/

発話NO		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
基本周波数の絶対変化量	上昇 (Hz) ①	56	50	62	31	56	49	43	25	56	31	74	50	58	49	68	29	44	62	62	26
	全体下降 (Hz) ②	62	50	45	62	37	80	58	19	71	61	62	50	58	23	26	32	44	33	62	26
	下まわり下降 (Hz) ①-②	-6	0	17	-31	19	-31	-15	6	-15	-30	12	0	0	26	42	-3	0	29	0	0
基本周波数の変化	第1下降の始まる拍	2	2	2	2	2	2	2.5	2.5	2.5	2.5	3	3	3	3	3	3	3	3	3	4.5
	第2上昇の有無				↑							↑									
	第2下降の始まる拍					4	4.5	4.5				4.5					4.5		4.5		
	初頭の高さを下まわる拍	4	*	*	2	*	2	4	*	3	2	*	*	*	*	*	*	4	*	*	*
聞こえ	上昇の聞こえ	1	-2	2	1	2	1	-2	2	-2	2	-2	2	-2	2	-2	2	-2	2	-2	-2
	第1下降の聞こえ	-2	1.5	-4	-2	4	1.5	-2	-4	-2	-2	4	-2	-2	-5	-3	-2	-2	-3	-2	-4
	第2下降の聞こえ		-4		-4			3			-3	4		-4							

【表8】南伊豆 T K氏 「構」 /○○○/

発話NO		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
基本周波数の絶対変化量	上昇 (Hz) ①	43	50	35	42	37	38	29	35	25	44	43	49	49	26	41	32	42	39	42	38
	全体下降 (Hz) ②	81	84	56	63	45	75	26	75	58	39	62	43	75	58	47	32	45	39	82	76
	下まわり下降 (Hz) ①-②	-38	-34	-21	-21	-8	-37	3	-40	-33	5	-19	6	-26	-32	-6	0	-3	0	-40	-38
基本周波数の変化	第1下降の始まる拍	2	2	2	2	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
	第2上昇の有無					↑					↑										
	第2下降の始まる拍				*						4									4.5	4.5
	初頭の高さを下まわる拍	3	3	3	2	4	3	*	3	3	*	3	*	4	3	4	*	4	*	3	3
聞こえ	上昇の聞こえ	1	2	2	-2	2	-2	-2	-2	-2	1	-2	2	-2	2	-2	2	-2	2	2	-2
	第1下降の聞こえ	-2	1.5	-2	-2	3	-2	-4	-2	1.5	-3	-3	0	-2	-2	3	0	0	0	2	-2
	第2下降の聞こえ						-3		-3					-3							

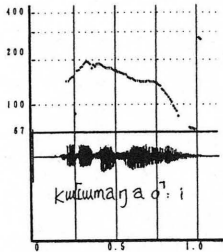


図1 東京アナウンサー「車」
(発話NO. 1)

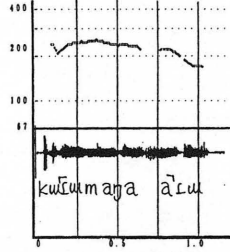


図2 東京NM氏「車」
(発話NO. 8)

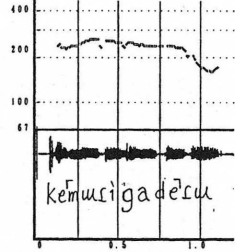


図3 東京NM氏「煙」
(発話NO. 2)

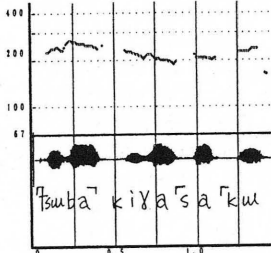


図4 南伊豆TK氏「轎」
(発話NO. 1)

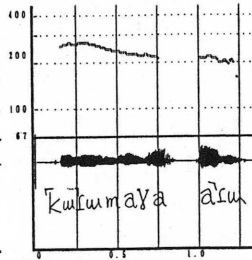


図5 南伊豆TK氏「車」
(発話NO. 5)

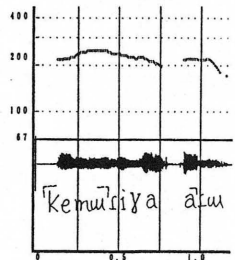


図6 南伊豆TK氏「煙」
(発話NO. 14)

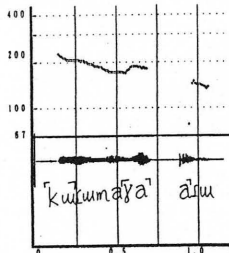


図7 南伊豆TK氏「車」
(発話NO. 1)

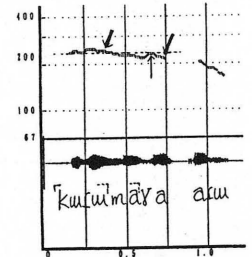


図8 南伊豆TK氏「車」
(発話NO. 12)

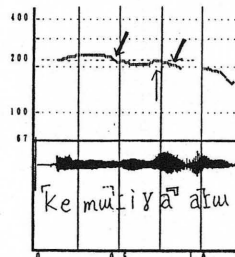


図9 南伊豆TK氏「煙」
(発話NO. 10)

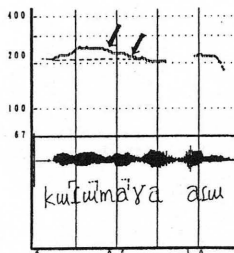


図10 南伊豆TK氏「車」
(発話NO. 17)

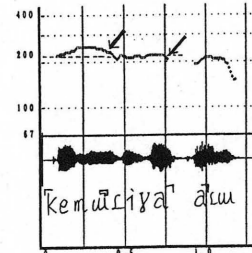


図11 南伊豆TK氏「煙」
(発話NO. 11)

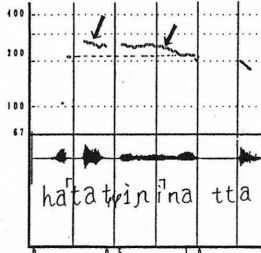


図12 南伊豆TK氏「二十歳」
(発話NO. 5)

5-1. 基本周波数の変化パターン

①下降が1回の音相

南伊豆町方言の音調には、文節中に下降が2回現れて連続下降をしたり、更に第2上昇が起きて重起伏になることがあるが、先に下降が1回みの発話に限って見る。

まず、下降の始まる拍は「1」～「4.5」までと幅が広い。その中でも出現頻度の高い位置は「2」(図4)「2.5」(図5)「3」(図6)である。全体中2例(「車」NO.1、「煙」NO.1)しかないが「1」(図7)も確かに存在する。これは前稿で扱った／○⁷○○／(東京語の頭高型に相当する)にも見られなかったパターンである。

初頭の高さを下まわる拍は「1」～「*」と、これも範囲が広い。出現頻度の高い位置は「* (下まわらない)」「4」「3」である。

下降の始まる拍と初頭の高さを下まわる拍との組み合わせにも、取り立てて傾向は見いだせない。例えば「車」の発話NO2~4のように、下降の始まりが「2」と早くても、初頭の高さを下まわる拍は「2」「3」「*」がそれぞれがある。

語による傾向にも特に目立つものは無く、4語の傾向が似通っていることは、これらがやはり同じ型の所属語であることを裏付けている。ただ、「二十歳」の初頭を下まわる拍に「* (下まわらない)」が10発話あり、他の語より多いことが目立つ。「二十歳」の発話だけは助詞を「が」でなく「に」をとって、「二十歳になる」という発話文になっていることが原因かもしれない。しかし、この10発話のうち6発話は、下まわり下降量が「0Hz」、つまり文節末で初頭の高さとちょうど同じ位置まで下がった発話で、実は「*」に近い。これを除けばほかの語例と大差はない。

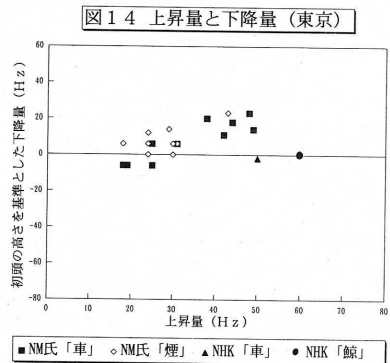
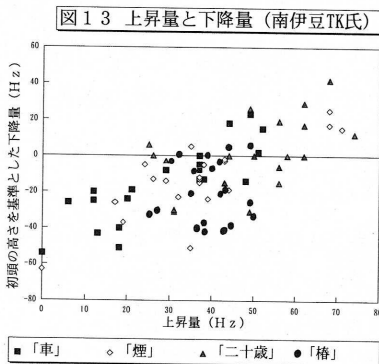
②第2下降のある音相

次に第2下降のある連続下降や重起伏の形を示す発話について見る。前稿の有核型にも、とりわけ／○○○⁷／に同様の発話が存在していた。東

京語の無核型でも、アナウンサーの発話に顕著なように、確かに下降は何拍にもわたって徐々に続いているが、これは連続下降とは見なさない。当該方言で第2下降があると指摘できるのは、1度下降をした後に再び上昇をしたり基本周波数が平坦になることがあるからである。基本周波数曲線の形状は、前者はM字型に山が二つでき(図8・9)、後者は階段状になる(図10・11・12)。この第2下降の始まる位置は「3.5」「4」「4.5」「*」で、このうち多いのは「4」「4.5」である。これらについては後にまた述べる。

5-2. 絶対変化量

上昇や下降の絶対的な基本周波数の変化幅から見ても同じことが言える。次の図13・14は上昇量と下降量の関係をプロットしたグラフである。ここに示す下降量は、初頭から助詞までの第2上昇・第2下降を含めた、文節全体としての変化量の幅である。これを見ると、東京語と南伊豆方言の音調バリエーションの広さの違いが明らかである。わずかだが双方ともグラフ中のプロットは右上がりの分布で、上昇量が多いほど下まわる下降量は少ないという相関関係がある程度認められる。



しかし、南伊豆は東京に比べて上昇量も下降量も分布領域が幅広い。また、東京語の下降量はプラスの値が多く、初頭の位置を文節中は下まわることがないが、一方南伊豆方言ではプラス値も示すが、発話の約3分の2

はマイナス値を示し、初頭の高さを下まわることが多い。

6. 聞こえと基本周波数曲線の対応

篠木・佐藤（前掲）に指摘されている聴き取りにおける調査者自身の方言の影響は、東京語的な聴き取りをする調査者（筆者）が南伊豆町方言を聴き取るにあたって同様に認められることは前稿で確認した。特に連続下降や重起伏などの音相は必ずしも基本周波数のとおりに聴き取っていなかった。無核型の音調はどうであろうか。

まず、無核型の聴き取りは、有核型にまして下降位置を特定しにくく感じ、またその上昇下降も段差が小さくて不明瞭な印象を受ける。このような中途半端な高さに感じられる音相は前述の中條（前掲）や、馬瀬（1961）でも指摘されている。表中ではこれをマイナス付きの数値で表している。調査者は南伊豆の発話のほとんどを小さな段差として聴き取っている。数は少ないが、明瞭な段差だと感じる発話を見ると、2拍目以前に明瞭な下降を聞き取るのは、下まわり下降量が「 $-38 \sim -51 \text{ Hz}$ 」のように大きいものである。3拍目より後でならば「 -10 Hz 」に以下でも、また「4（助詞の後の下降）」ならば初頭の高さを下まわらなくても明瞭だと感じている。しかし、例えば「煙」のNO.12とNO.17のように、似たような基本周波数でも異なる段差に聴き取っている。絶対的な数値の幅に決定的な差は認められない。

下降があると聞こえる位置については、東京語ではほぼ「0」に聴いており、ときに「 -4 」（助詞の後でやや下がって聞こえる）や「 -3 」がある程度である。これに対して南伊豆では格段に種類が多い。前項で見たように基本周波数の動態と変化量自体に幅があるのだから当然のことではある。

この聞こえを、東京語の基準となっている初頭の高さを下まわる拍との関係からみる。東京語的聴き取りをする調査者はこれを基準にしていると

予想されるが、下まわり位置が同じ「煙」のNO.2・4・14~17や「二十歳」のNO.2・3・8~10・12~15・19でも下降位置を異なって聴き取っていて、相関は見いだせない。南伊豆方言有核型の特徴となっていた下降の始まる拍との関係を見ても、「車」のNO.4~11のようにこれも様々に聴き取っている。

基本周波数曲線の上で連続下降や重起伏を示す発話についても、「車」のNO.18や「椿」のNO.18などのように、第2下降が無視され、基本周波数上の変化を必ずしも聞き取っていない。この点は前稿でも指摘したことだが、無核型ではさらに「車」のNO.2・4・6、「二十歳」のNO.9・2・12などのように、基本周波数上にはない第2下降まで聴いている点が注意される。

このように、基本周波数の特徴と聞き取りの間には明確な対応がないのはなぜであろうか。南伊豆方言の基本周波数は文節中で初頭の高さを下まわることが多く、そのため下降があると聞こえるが、その一方で上昇の幅も小さく下降の傾斜が非常に緩やかであることが原因ではないかと思われる。東京NM氏のように上昇も小さく下降の傾斜が緩やかであっても、初頭の高さを下まわらなければ聴き取りに迷いはない。前稿に示した(注4)有核型の基本周波数と比べても、東京語では初頭の高さを下まわるときはかなり明瞭な下降を示す。この違いが、南伊豆の音調では初頭の高さを下まわった位置をはっきりさせられない、かといって下降がないとも言えないという、調査者にとっては不安定な聞こえに感じさせているのであろう。

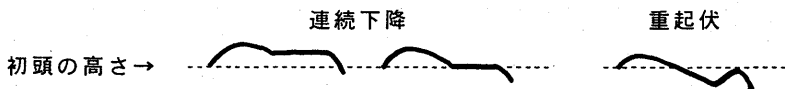
7. 連続下降及び重起伏と初頭の高さ

以上のように南伊豆方言の無核型の音調は基本周波数曲線の上でもバラエティに富み、聴き取りにおいては不安定である。このこと自体が無核型の特徴ではあるが、もう一つの特徴について述べたい。それは、先にも少

し触れた連続下降と重起伏に見られる。なお、基本周波数曲線の形状が階段状や M 字型になっていなくても聞こえの上で連続下降に聴き取っているものがあつたが、以下ではそれを除いて考える。

連続下降と重起伏の間には第 2 上昇の有無という違いのほかに、もう一つの傾向がある。それは第 2 下降が起こる以前に基本周波数が初頭の高さを下まわるかどうかという点である。今回の資料で第 2 下降のある発話は 25 例あるが、そのうち第 2 上昇を持つ 11 例中 9 例（「車」NO. 1・12・13・14、「煙」NO. 10、「二十歳」NO. 4・10、「椿」NO. 4・9）は第 1 下降の後、初頭の高さを下まわっている（図 8・9）。第 2 上昇を持たない連続下降は、14 例中 10 例（「車」NO. 17・19、「煙」NO. 9・11・18・19、「二十歳」NO. 5・16・18、「椿」NO. 18）が第 1 下降の段階では初頭の高さを下まわらない（図 10～12）。第 2 下降の後で下まわるが、時には「二十歳」の NO. 5 や NO. 18 のように、第 2 下降の後でも文節中は初頭の高さを下まわることはない発話もある。

さらに、重起伏音相の第 2 上昇の大きさを見ると、ほぼ初頭の高さにまで戻っている発話が多く、9 例中 7 例ある。残りの 2 例は初頭の高さには及ばないが、初頭の高さ以上に上昇することはない。また連続下降 9 例の中では、第 1 下降の結果、初頭の高さと同じ位置まで下がり、その位置で高さを保って平坦な形状を示す発話が 4 例（「車」NO. 19、「煙」NO. 9・11・19）ある（図 11）。模式図で表すと次のようになる。



つまり、第 1 下降でまだ発話初頭の高さを下まわっていなければ、初頭の高さと同じかそれ以上の基本周波数を文節末近くまで維持し、第 1 下降で初頭の高さを下まわってしまえば、文節末で初頭の高さまで一旦戻る。すなわち、「発話初頭の高さ」を文節末にまで維持しよう、維持できなければ回復しようとする動きであるといえないだろうか。重起伏になる発話の

下まわり下降量は、最低20Hz以上、平均で29.3Hzであり、先の図13の中に位置づけてみても下降量の大きい発話であることから納得できる。

つまり、南伊豆方言の無核型の音調には、東京語には見られない文節中に初頭の高さを下まわる音調が多く、しかもその下まわる位置はいろいろな拍で起こるのだが、それでも「初頭の高さ」というものが何らかの基準として働いているということである。従って、無核型で重要なのは第2下降ではなく、高さを平らに維持する、または第2上昇をすることの方だということになる。そもそも第2下降自身は下降量が小さい上に、時間上の長さも非常に短い。調査者には聴き取れないこともある。第2下降のない発話(図4~6)における、時間をかけた緩やかな下降とは異なり、短く落ちるような感じである。

むろん、この高さの維持や第2上昇は必ずあるとはかぎらない。表5~7を見てのとおり、第1下降で早々に初頭の高さを下まわったまま、文節末まで下がり続ける発話も多いのである。

このように無核型においても「発話初頭の高さ」というものが基準として働いていることは確かだと思われる。それがいつも働くとは限らないのはなぜだろうか。この基準が効力として弱いために働かないことがあるのか、働かせない何かがあるのだろうか(注4)。当該方言の音調は、機能や性質を一元的に考えられないようである。これは有核型と併せて考察したい。

8. まとめ

以上述べたように南伊豆町方言の無核型音調の基本周波数変化に見られる特徴は、変化量の幅も、下降の始まる位置や初頭の高さを下まわる位置などの変化パターン自体もバリエーションに富んでいることにある。東京語との最大の違いは発話初頭の高さを文節中で下まわることである。しか

し、南伊豆方言の無核型の上昇は小さく下降は緩やかで、実際のところ、NHK アナウンサーの無核型の語の発話の方がよほど下降の傾斜は急である。そのため、東京語的聞き取りでは下降したと感ずる位置が特定しにくく、下降も段差が小さく感ずられるのである。

緩やかな下降と言って思い出されるのは、上野（1988）の「下降式アクセント」や佐藤（1987・1996）の「下降調」である。南伊豆町方言の無核型音調がこの下降式に相当するとは言わないが、「緩やかな」下降が多くなる方言において弁別的に機能していないからといってそれが「不安定」な、あるいは「過渡的な」音調であるという理解は誤りであるという佐藤氏のことばは重要である。本稿も南伊豆町方言には「緩やかな下降」という音調が存在することを積極的に認めたい。

また、連続下降・重起伏という音相は、聞こえと一致しない場合もあるが、少なくとも基本周波数曲線の上で確かに存在することが確認できた。これらは、下降が初頭の高さを維持したり、「初頭の高さ」に戻ろうとすることによって生まれた音相であると考えられる（注5）。

残された課題は、本稿の無核型の結果と、前稿の有核型の結果と併せて3拍名詞の全体として南伊豆町方言の基本周波数変化の特徴をまとめることである。特に有核型／○○○[∩]／と無核型／○○○／は、下降の始まる位置の許容範囲が広いという似た傾向を持っており、両者の境界が明確に見いだせるかどうかの問題である。また、これらの特徴は、実際の話者における認識に合致するものであるかも明らかにする必要があるだろう。

〈注〉

1. 杉藤美代子ほか（1992）「全国共通項目(2)」(『日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究』音声データベース)より抽出した。
2. 「車・煙・二十歳・椿」の4語とも20回分の発話が分析できたのは偶然の一致である。
3. 語の型所属は拙稿（1994）を参照

4. 前稿の図5・7・10・12

5. 拙稿(1994)で、聴き取りによる音調バリエーションから帰納した2つの音声的規則<初頭さがり規則>(発話の初頭で上昇しその後すぐに下降しなければならない)と<高さ保ち規則>(音韻論的に下降の許される標識の位置までは明らかに高く発話しなければならない)のうち、後者と類似する。音響分析による考察でも同様の結果に導かれたことは重要である。

<参考文献>

- 今川博・桐谷滋(1989)「DSPを用いたピッチ・フォルマント実時間抽出とその発音訓練への応用」『電子情報通信学会技術研究報告』SP-89-36
- 上野善道(1977)「新潟県村上方言のアクセント」『金田一春彦博士古稀記念論文集第2巻』三省堂
- 上野善道(1988)「下降式の意味するもの」
- 亀田裕見(1994)「自由変異体の多い方言音調の構造的記述—静岡県南伊豆町方言における3拍名詞について—」『国語学』179
- 亀田裕見(1998)「静岡県南伊豆町方言における音調バリエーションと基本周波数曲線—有核型の下降に関する形状と聞こえ—」『文教大学文学部紀要』11-2
- 佐藤栄作(1987)「アクセントの「下降調」をめぐって—併せて香川県高瀬アクセントの用言の音調の報告—」(日本方言研究会第44回研究会発表原稿集)
- 佐藤栄作(1996)「ゆるやかな下降調の聴き取りと内省について」『言語学林1995~1996』三省堂
- 篠木れい子・佐藤和之(1991・1992)「無形アクセントの音相実態と共通語化(1)(2)—栃木県氏家町方言アクセントを例として—」(文部省重点領域研究「日本語音声」研究成果報告書『東日本の音声論文編(1)(2)』)
- 杉藤美代子(1969 a)「動態測定による日本語アクセントの解明」『言語研究』55
- 杉藤美代子(1969 b)「音程動態測定による大阪・東京アクセントの一考察」『国語学』79
- 杉藤美代子(1972)「おそ下り考—動態測定による日本語アクセントの研究(その一)」『大阪樟蔭女子大学論集』10
- 中條 修(1983)「5. 静岡県の方言」『講座方言学6 中部地方の方言』国書刊行会

静岡県南伊豆町方言における無核型音調の音響学的特徴と聞こえ

中條 修 (1996) 「伊豆南部特殊アクセント」『日本語研究諸領域の視点下
巻』平山輝男博士米寿記念会編 明治書院

馬瀬良雄 (1961) 「三、方言の実体と共通語化の問題点 9. 山梨・静岡・長
野」『方言学講座 2 東武方言』東京堂